

パパ友を作ろう！ 父親たちの「笑顔」が 子どもを育てる

次世代を担う子どもを育てるとい
こと——それはどんな仕事にも勝る壮
大なプロジェクトだと、私は思ってい
ます。そして、せっかく機会に恵まれ
て父親になれたのだからそれを楽しま
ない手はない、とも思います。

最近では男性の育児への参加率が増
加してきていますが、まだ「しなけれ
ばならない」という義務感が先行して
いる人、完璧さを求めてしまう人が多
い。育児を楽しむところまではなかな
かいけないようです。子どもを育
てるということは、父親の「考え」を
押し付けるのではなく、子どもがもつ
て生まれてきた「育つ力」を信じ、そ
れを支え、導きながら一人前の大人に



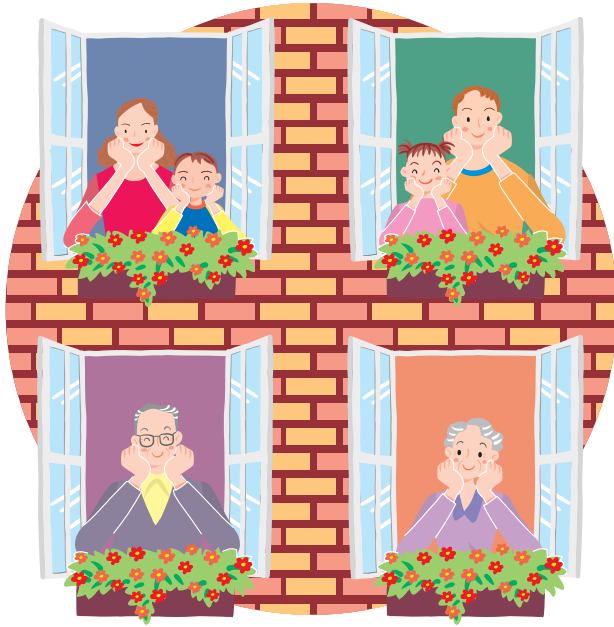
安藤 哲也

NPO 法人ファザリング・ジャパン代表理事

【あんどう てつや】1962 生まれ。3 児の父。父親支
援の NPO 法人ファザリング・ジャパン代表理事。
「Fathering = 父親であることを楽しもう」という考
えを持つ若い世代の父親を応援することを通じて、
働き方の見直しや、企業の意識改革、ひいては次
世代の育成までを目標にさまざまな事業を展開して
いる。2008 年 3 月には「第 1 回子育てパパ力（ぢ
から）検定」を開催。著書に「パパの極意～仕事
も育児も楽しむ生き方」（NHK 出版）、『絵本であそ
ぼ!』（小学館）がある。

することです。

しかし子どもは一人の父親だけでは
育ちません。さまざまな人間関係の中
で採まれ、ひとりの人間がつくられる
のです。子育てにおける親子（父子も
母子も）の関係、あるいは周囲の大人
と子どものふれあいというものは、本
質的には楽しむべきものです。楽しみ
ながら、夫婦や隣人同士も笑顔で関
係を円熟させていければ、それを見て
いる子どもは、自分の人生は平和で、
人間は信じられる存在であることを学
び、基本的な信頼（ベーシック・トラ
スト）を持つことができます。そして
それを軸として、家庭、幼稚園や学校、
地域社会の中で、一人前の大人にな



るために必要なものを自然と身につけていくのです。

「地域に友だちが出来る」と子育てはどんどん楽しくなるよ」という話を父親向けセミナーですと、「地域の人と仲良くしようにもきつかけがない。どうしたらいいですか？」と若いお父さんから聞かれることがあります。最近はお互いの家庭に踏み込むまいと、過剰に遠慮して交流の機会を失ってしまっている人も多いようで、それは本当にもつたいないことだと思えます。近所づきあいを「余計なおせっかい」

と思う人もいるかもしれない。でも、これからは「おせっかい」がいい意味で見直されるべきだと思います。都市化・核家族化の中、マンションの一室で孤立する子育てに必要なのは、この「おせっかい」イコール「ご近所のチカラ」なのです

もし子育ての現状がうまくいってなくて苦しいときがあるのなら、なおさらです。自分の家だけで抱え込まずに、まずは勇気を出して周りに助けを求める方がいい。いざというときは遠くの親戚より近くの他人。子どもを預けたり、預かったり、大変なときはお互いに助け合えばいいのです。わが家もよく、娘や息子の友だちがご飯を食べに来たり泊まったりしています。親が忙しいときなどは当たり前のように預け合っている。子育て家庭はお互い様なのです。

たしかに「助けを求める」というのは、やり慣れていないと、とても勇気のいることかもしれません。もし母親がシャイだったり、頑張り屋さんで「人に頼らず自分でなんとかしなくては」と考えてしまう性格でそういう「お互い様な関係」を作れないでいるのなら、父親がその役割を果たしてください。きつかけは何でもいいのです。たとえば近所の公園や図書館で、子どもを連れてくる人に話しかける。あいさつを

かわす程度の隣人と、もっと話してみたいなら、冷えたビールを持ってドアをノックすればいい。大切なのは考え過ぎずにまずはやってみること。話してみると仕事の業界が一緒だったり、年齢や出身地が同じだったり結構共通項があるもので、「なんだ、もっと早く知り合いになっておけばよかった」なんてことがよくあります。

近所に同じ歳の子どもがいる家族と繋がると、子育ての局面でいろいろなメリットがあります。困った時に支え合っていけるから子育てがずつとラクになるし、また子どもにとっても自分のパパとは違う父性に触れられるし、特に一人っ子の子どもにとっては兄弟・姉妹が出来た感じであれいではないでしょうか。かく言う私も同じ町で十年間子育てをし、今では「駅前の行きつけの飲み屋で一杯やらない？」と声をかけられる地域のパパ友が二〇人くらい出来ました。子ども連れで集まっては「今度の連休、何やる？」なんて遊びの相談ばかりしています。でもそれが楽しいのです。

地域コミュニティのあり方を考えるとき、私はいつも自らにこう問いかけます。「私たちが暮らしていてハッピーに感じるのはどのようときか?」。経験も含めて、私にはひとつの答えがあります。それは「他人とのすばらし

い関係性が成立したとき」です。表面的な挨拶・会話だけでなく、人と人が向き合う中でお互いの考えや立場を尊重し、例えばより良い地域について前向きに話し合えるとき。またそのアイデアを一緒に実践し、子どもたちや住民の笑顔をみて「やってよかった」と喜びを分かちあえる瞬間に、地域の中の役割の重要性と面白さに気づき、私たちの人生と子どもたちの未来に希望を持てるのです。

父親が子育てすれば、これまで見えなかったことが見えてきます。家庭という枠を越えて地域活動へ参加すれば、会社では味わえない仕事の達成感を得たり、一生付き合える隣人ネットワークも持てます。それによって父親自身も世界が広がり人間の幅が出来る、それが本業の仕事にも活かされてくるのだと思います。しかし、子育てに主体的に関わるのがこんなに「いいことづくめ」なのに、それでもまったく興味がない男性はまだ多い。そもそも「父親を楽しもう」「地域で父親を發揮しよう」なんて発想すらない。「男は外で働いて稼いで家族を養う」ということだけが父親の仕事だとまだ思っている男性は少なからずいます。

社会構造が変化する中、一〇年前に相次いで起こった大企業の破綻は、

終身雇用制といった安定的仕事スタイルの終焉でした。と同時に「会社（組織）への帰属意識」もなくなった瞬間でありました。そして、いまや格差社会。会社員は評価主義の中で、勝ち組・負け組のどちらかに分けられてしまっている。けれども今、勝ち組とされる人たちの中に、人生の充実感や幸福感がないようにも思います。リストラを免れて残った人たちにとっては、バブル崩壊以降に業績も回復し給料も上がったけれど、結局は自分の残業が三〜四時間増えただけで、子どもの寝顔しか見られないのではないのでしょうか。そんな子育て世代の中堅社員がすごく疲弊していて、その父親のストレスやあり方が乳幼児のいる家庭や地域社会に悪影響を及ぼしている気がします。現代家族のアンハッピー感や地域社会の崩壊は、その辺に主な原因があるのではないかと私は思っています。

最近、団塊世代の「地域デビュー」が話題になっていますが、定年後、地元知り合いがいなかったため行き場を失っている男性の悲哀は見ていて忍びありません。そんな姿をみて若い世代の男性は「ああいう風にはなりたくない」と考え始めています。しかし周囲に、よいロールモデル（手本）がいないから、どう生きればいいのか分らないで、ただ周囲に合わせるだけのよ

うに見えます。新聞紙上を賑わす言葉「ワーク・ライフバランス」も大方の人は捉え方を間違っています。仕事か、生活かのどちらかを取る二者択一ではなく、仕事も子育ても諦めずすべて楽しめるように自分なりのハッピーバランスを考える「寄せ鍋の人生」でいることが大事なのです。

ヒントは子育て時代の「地域」にあります。子どもを持つということは、「地元」という最高のトレジャーランドの入場券を手にする事なのです。昔、友達と遅くまで遊んでいた子ども時代の気持ちに還り、学校や町内会のイベントでピュアな楽しさを追求する。そんな原点復帰こそが、父親ネットワーク構築の原動力となり、それがエンジンとして稼働してくれば家族や地域社会の幸せに繋がっていくのだと思います。

私は、NPO「ファザリング・ジヤパン」の活動のほかに、五年前から「パパs絵本プロジェクト」という、父親による絵本の読み聞かせボランティアを行っています。まさにパパ友たちによる「部活」でそれはとても楽しい活動なのですが、父親として気になることがありました。それは私たちのイベントに集まってきた子どもの中に、面白い絵本に反応しない、笑うことができない子どもが必ずいることで



す。周りの子どもたちが大声で笑っても、取り残されたように笑えない子ども。そんな子の後ろをたどると、やっぱり笑うことができない父親や母親が必ずいます。たぶんお父さんは長時間労働で、お母さんも育児で疲れ果てて笑顔がないので、子どもは笑い方がわからないのです。それは本当に不幸な

ことです。

子どもはとても素直です。つまらない場所からはすぐに逃げてしまう。父親と一緒にいるのに、お父さんが不機嫌な顔をしていたら子どもだってつまらない。そして結局、父親からは離れてしまう。そんなコミュニケーション不全な幼少期を過ごさせてしまった後で、進学や就職のときにだけ父親風を吹かせて、ああしろ、こうしろと言ったって説得力はないと思います。

ではどうやって育児を楽しむのか？ まずは何でもいいので、子どもと心の芯の部分でふれあってほしいと思います。絵本もひとつのきっかけですが、「絵本は苦手」という人は、自分が欲しいと思っている車のカタログと一緒に見ることでいいのです。「このカタチがかっこいいだろ！」なんて言いながら、お父さんが好きなもの、夢中になれるものを子どもと一緒に楽しむことが大切です。子どもはパパのそんな笑顔が好きなのです。

男は、子どもとのコミュニケーションを通じて徐々に父親になっていくものではないでしょうか。父親が乳児期の子どもとともに過ごしたいのなら育児休業制度はぜひとも使うべきだと思います。職場の男性でこれまで取得した人がいないから取れないということではなく、自分の信念のもとに取れば

いいんです。育児に主体的に関わることは男性にとって一人前の親になるチャンスです。育児が自分にとって家族にとつてどれだけ大事なことになるのか、ひいてはそれが社会にとつてどれだけ利益をもたらすのか、上司を説得することができれば、それは公務員としても一歩成長したことになるはずですよ。

子どもは未来です。彼らが大人になって、この世界で果たす役割はとても大きい。だから父親業ほど面白い仕事はないのです。子どもたちの健全な成長のためには、まずは父親が自分の人生を肯定できて笑顔でいることが大切。そしてこれからの父親の育児で重要なのは、決して「自家完結」せず、地域の中で「パパ友」（子育て仲間）を作り、ゆるやかなネットワークの中で子育てしていくことです。

仕事はもちろん大事ですが、もはやワーカホリックな仕事一辺倒の生き方では自分も周囲（家族）も幸せにはなりません。男は仕事だけして給料を運んでいけばよいという概念はただの刷り込み、前時代の遺物でしかないのです。これからは頭を切り替えて、自身の働き方を見直し、子どものいる暮らしを楽しむことで父親だって笑う幸せな人生を送ることができ、そういう時代だということ認識して、ぜひ実践してもらいたいと思います。